

シリーズ 3、富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン②

職藝学院

教授 渡邊美保子

ギボウシ

宿根草は、葉っぱの色や形を組み合わせでデザインすることも出来ます。葉を楽しむ代表的な宿根草として、ここ数年たくさんのギボウシの品種が流通するようになりました。江戸時代、シーボルトがヨーロッパへ持ち帰って以来、海外では数多くの品種が作り出されました。園芸店で見かける品種は、もともとは日本のギボウシが品種となって里帰りしたと考えるとなんだかとても愛おしくなります。



写真1：職藝学院宿根草実験ガーデン

写真1は、青みがかった葉をもつギボウシ・ハルシオンと、葉の縁を黄色い筆で塗ったようなギボウシの品種ワイドプリム、その手前にライムグリーンの小さな葉のリシマキア・ヌムラリアの品種オーレア、赤紫の小花が空中をふわふわ飛んでいるように咲くアケボノフウロの品種マックスフレイです。組み合わせのポイントは、葉の色が反対色になる黄色系と青色系の葉を隣同士になるように植栽することです。このときにアクセントになる明るめの小花の咲く宿根草を組み合わせますと、デザインが引き締まります。ただし、大きな花は、むしろ目立ってしまうのであくまでもギボウシの脇役になる小花を選びます。また、斑入りの品種は多くても2種類ぐらいで異なる

斑の色を選びます。たくさん入れすぎると目がそちらこちらに遊んで落ちつきのない庭になるので気をつけましょう。

庭園でギボウシの園芸品種を育てるコツは、日本の森に自生している原種のギボウシが育っている環境をつくることです。日本を代表する原種オオバギボウシなどは、落葉樹の森の林縁の明るい木陰がお気に入りです。ギボウシの芽吹きの前は十分に太陽の光が入り、葉を広げる頃には木々の葉が茂り、秋にギボウシの葉が枯れる頃には落ち葉がギボウシの上に積もります。このような自然をお手本にして、植え付けの際には腐葉土をたっぷりとすきこみ、庭園でも森と同じような環境をつくりましょう。たとえば、庭の南側に落葉樹がある方は、木の北側の根元に植栽することをおすすめします（写真2）。横に伸びた木の枝が太陽をさえぎり、やわらかな木漏れ日があたる環境ができあがります。秋に落葉樹の葉が落ちたら、そのままギボウシに被せるようにして、森と同じように時間をかけて腐食に富んだ土を作りましょう。落葉樹がない方は、家の東側など午前中は日が当たり、午後は日陰になるような場所を選びます。



写真2：早稲田大学ワポットハウス研究所中庭(岐阜)